CREDIT

構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 田村友一郎

出演・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 山崎皓司、荒木悠

ドラマトゥルク・・・・・・・・ 前原拓也

照明・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 高原文江

照明オペレーター・・・・・・ 海老澤美幸（Licka）

サウンドデザイン・・・・・・ 荒木優光

音響・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 甲田徹

映像・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 松見拓也

映像アシスタント・・・・・・ 福岡想

衣装スタイリング・・・・・・ 小山田孝司

翻訳・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 奥村雄樹

印刷物デザイン・・・・・・・・ 尾中俊介（Calamari Inc.）

映像記録・・・・・・・・・・・・・・ 西野正将

企画・制作・・・・・・・・・・・・・ 中山佐代

協力・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ユカ・ツルノ・ギャラリー

舞台芸術研究センター

舞台監督・・・・・・・・・・・・・・ 大田和司

制作・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 竹宮華美、後藤孝典、河本彩

管理・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 結城敏恵

劇場担当・・・・・・・・・・・・・・ 山中仁（舞台）、才木美里（音響）、小山陽美（照明）

主催・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 学校法人瓜生山学園 京都芸術大学 舞台芸術研究センター

大学開学 30 周年記念｜劇場 20 周年記念公演

田村友一郎｜テイストレス

2021 年 6 月 27 日（日）13:00 / 16:00
京都芸術劇場 春秋座（京都芸術大学内）

Not that the world is about to “end”.

The implication is rather that it has already ended and regenerated itself an infinite number of times,

and that the only remaining question is what to do with ourselves in the meantime.

J. G. Ballard

ご挨拶

本公演は、京都芸術大学の共同利用・共同研究拠点事業〈舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点〉劇場実験型公募研究「The Waiting Grounds――舞台芸術と劇場の現在を巡る領域横断的試み」という研究プロジェクトとして昨年開催予定でしたが、COVID-19 の影響を受けて中止となり、この度、舞台芸術研究センターの主催公演として改めて実施する機会をいただきました。

現代アーティストの田村友一郎さんと見慣れた劇場を巡り直す中で、光が差し込むようにいくつもの発見がありました。2 階客席もそのひとつです。最後までお楽しみいただけましたら幸いです。足をお運びいただいた皆さまに心から感謝しております。

中山佐代（企画制作）

チューインガムのドラマトゥルギー

『テイストレス』を支えるのは、チューインガムのドラマトゥルギーである。ドラマトゥルギーという概念は、演劇の作劇術を表すことから始まり、演劇以外にも様々な物事の分析手法として援用されてきた。チューインガムは、その名が示す通り、人が「咀嚼（そしゃく）（チューイン）」することにより存在すると言えるだろう。噛まれ始めると、唾液と混ざり合い、味が充満している状態から、味が無い状態へと単線的に進行していく。ある充実から、ある空虚へ進行していくドラマトゥルギーが、第一にチューインガムを特徴づける。本作の組み立ては、そんなチューインガムの特徴をベースに構成している。

チューインガム自体の特徴から離れて、人間に目を向けてみよう。人々が、味が無くなってもなぜだか同じガムを咀嚼し続けてしまうという習慣も、チューインガムのドラマトゥルギーにおいて重要な意味を持つ。一般に人間が口にする物は、味と共に胃へと消化されていく。一方で、チューインガムは味が無くなっても口に残り、だらだらと咀嚼され続ける。味が無くなっても噛み続けるという状態は、現代社会を取り巻く状況と相似形を示すだろう。我々は、形骸化した悪習を「口さみしく」噛み続けてしまう。

そんな「口さみしさ」として、チューインガム開発の先駆けである国アメリカの見果てぬ夢、「アメリカンドリーム」を参照した。実力だけでのし上がれる自由の国アメリカ。強国の「自由」が揺らいで久しいが、皆アメリカという幻影への挑戦を続ける。そしてアメリカ自身も、何度も失敗を繰り返しながら、自国の誇りである夢の宇宙開発を続ける。まるで味の無くなったチューインガムを噛み続けるように。

最後に、日本という国におけるチューインガムの役割も、そのドラマトゥルギーに影響を与える。チューインガムを噛むという習慣は、戦後になってから日本でポピュラーになった。戦後のアメリカ文化への憧れと並行して、この習慣も共に輸入されたのである。メジャーリーガーやハリウッド俳優が咀嚼するガムは、メディアを通じてグローバルに強者のイメージを流布した。チューインガムを噛むことは、強者たちを模倣することなのかもしれない。

以上のような様々な文脈が交錯するチューインガムを、我々は自らの意志で口に入れる。しかし、味が無くなっていくことに気付くと、こう問いかけることもあるだろう。我々はガムを噛んでいるのだろうか。それともガムに噛まされているのだろうか。

前原拓也（ドラマトゥルク）

田村友一郎　Yuichiro Tamura　（構成）

1977 年富山県生まれ、京都府在住。東京芸術大学大学院映像研究科後期博士課程修了。ベルリン芸術大学空間実験研究所在籍(2013-2014)。名古屋芸術大学准教授。既存のイメージやオブジェクトを起点にした作品を手掛ける。土地固有の歴史的主題から身近な大衆的主題まで対象は幅広く、現実と虚構を交差させつつ多層的な物語を構築する。近年の展覧会に、個展「Milky Mountain/ 裏返りの山」(Govett-Brewster Art Gallery、ニュージーランド、2019)、「叫び声 /Hell Scream」（京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、京都、2018）、グループ展「ヨコハマトリエンナーレ 2020」（横浜美術館、横浜、2020）、「Readings From Below」（Times Art Center Berlin、ベルリン、2020）、「磯人麗水 | ISDRSI」（豊岡市立美術館ほか、兵庫、2020）、「アジア・アート・ビエンナーレ」（国立台湾美術館、台中、2019）、「話しているのは誰？現代美術に潜む文学」（国立新美術館、東京、2019）、「美術館の七燈」（広島市現代美術館、広島、2019）、「六本木クロッシング 2019」（森美術館、東京、2019）、釜山ビエンナーレ（釜山現代美術館、韓国、2018）、日産アートアワード 2017（BankART Studio NYK、横浜、2017）、「2 or 3 Tigers」(世界文化の家、ベルリン、2017)、「BODY/PLAY/POLITICS」(横浜美術館、横浜、2016) など。
www.damianoyurkiewich.com

山崎皓司　Koji Yamazaki　（出演）

1982 年静岡県掛川市生まれ。劇団「快快 (FAIFAI)」パフォーマー。2019 年から活動拠点を東京から静岡県掛川市に移し、現在は“百の姓を持つ、百の屋号を持つ、百の仕事を持つという意味での百姓”を志し、俳優、狩猟、農業、養蜂、人の仕事の手伝い等をしながら、世界平和への道を模索している。百姓生活を記録したドキュメンタリー作品「Koji Return」が YouTube で公開中。

荒木悠　Yu Araki　（出演）

1985 年山形県生まれ。東京都在住。大学では彫刻を、大学院では映像を学ぶ。近年の主な展覧会に、個展「αM プロジェクト 2020–2021 約束の凝集 vol.4 荒木悠」（gallery aM、東京、2021）、「三泊五日 THREE DAYS, FIVE NIGHTS」（板室温泉 大黒屋、栃木、2021）「RUSH HOUR」（CAI02、札幌、2019）、「ニッポンノミヤゲ　LE SOUVENIR DU JAPON」（資生堂ギャラリー、東京、2019）、「New Apéritif」（スプリングバレーブルワリー、京都、2019） など。グループ展に「11 Stories on Distanced Relationships: Contemporary Art from Japan」（国際交流基金、オンライン、2021）、「Connections - 海を越える憧れ、日本とフランスの 150 年」（ポーラ美術館、箱根、2020）、「CONTACT：つなぐ・むすぶ 日本と世界のアート展」（清水寺成就院、京都、2019）、「The Island of the Colorblind」（アートソンジェ・センター、ソウル、2019）、「Future Generation Art Prize」（ピンチューク・アートセンター、キエフ／ Palazzo Ca ‘Tron、ヴェネツィア、2019）など。田村友一郎作品は、2016 年の『裏切りの海 / Milky Bay』以来二度目の出演となる。http://www.yuaraki.com/

前原拓也　Takuya Maehara　（ドラマトゥルク）

1992 年東京生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科独文学専攻修士課程終了。修士課程では、スイスの演出家クリストフ・マルターラー作品の歌声の演出について研究を行った。ドラマトゥルクとして、オペラや現代劇等多ジャンルの作品に携わる。田村作品では、『栄光と終焉、もしくはその終演 / End Game』（2017 年）でドラマトゥルクを務めたほか、『MJ』（2019 年）等いくつかの作品でテキストの構成協力を行う。

中山佐代　Sayo Nakayama　（企画制作）

1985 年生まれ。京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科映像コース卒業。在学中は記録撮影で舞台に関わる。2012 年から 2016 年までマレビトの会の制作部に参加。同時にフリーランスの企画制作として様々な作家の公演に携わる。主な企画として、公演に関わる複製技術に着目した劇場実験《Showing》シリーズ（京都芸術劇場、2014-2016 年）があり、音響作家・荒木優光、美術家・加納俊輔、映像作家・伊藤高志の公演を共同企画した。伊藤高志作品『三人の女』は、あいちトリエンナーレ 2016 映像プログラムに招聘され愛知県芸術劇場にて再演。近年は、劇場や舞台を再考するために民俗芸能などのリサーチも行う。
https://sayonakayama.studio.site/